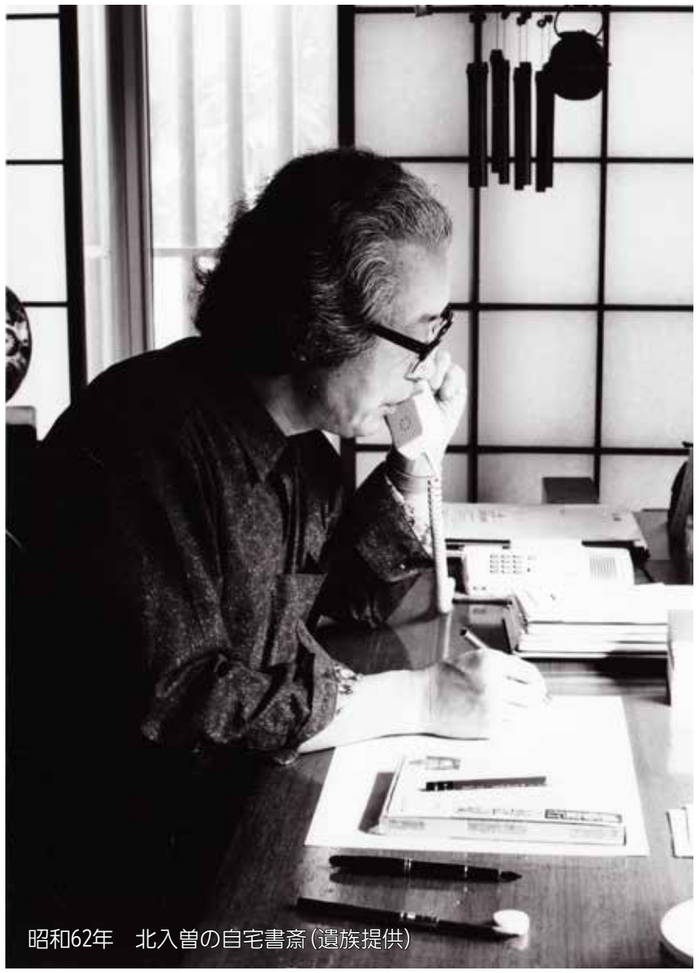
狭山を愛した詩人 吉野弘の足跡をたどる

『二人が睦まじくいるためには』で始まる、結婚披露宴でよく引用される「祝婚歌（7ページ）」や「Ｉ ｗａｓ ｂｏｒｎ」「奈々子に」「夕焼け」などの詩の作者で、日本を代表する詩人である故・吉野弘さん。吉野さんは、35年間を狭山市で過ごし、数多くの詩集や詩画集を発表してきました。その創作活動には、狭山での生活や自然に触れたことが大きな影響を与えたと言われています。

今月は、吉野さんに所縁のある方のお話を通じて、吉野さんが狭山に残した足跡をご紹介します。



昭和62年　北入曽の自宅書斎（遺族提供）

吉野弘氏の略歴と作品（主に狭山市での活動を掲載）

年	年齢	出来事
大正15年（1926）	０歳	１月16日、山形県酒田市で出生
昭和24年（1950）	24歳	肺結核になり入院・療養。入院中、詩人・富岡啓二氏を知り交友を深める
昭和27年（1952）	26歳	詩誌「詩学」に「爪」、「I was born」を投稿し、翌年の２月号で新人に推薦される。以後、同人誌「櫂(かい)」の他各種の雑誌、新聞などに詩や書評を発表する
昭和32年（1957）	31歳	処女詩集『消息』を刊行
昭和37年（1962）	36歳	コピーライターに転職し昭和55年まで継続。そのあとは文筆を専業とする
昭和47年（1972）	46歳	前年に刊行した『感傷旅行』により第23回読売文学賞を受賞。翌年、狭山市北入曽に自宅を構え転居
昭和52年（1977）	50歳	１月、詩集『北入曽』を刊行
昭和58年（1983）	57歳	「文芸狭山」（狭山市立図書館刊）の編集委員を担当(平成８年まで14年間)
平成元年（1989）	63歳	狭山市立入間野中学校の校歌を作詞
平成２年（1990）	64歳	詩集『自然渋滞』が第５回詩歌文学館賞を受賞
平成７年（1995）	69歳	埼玉県からの依頼により作詞した合唱曲「ケヤキ賛歌」が「彩の国県民芸術文化祭‘95」で演奏
平成８年（1996）	70歳	酒田市から平成８年度酒田市特別功労賞を受ける
平成10年（1998）	72歳	第41回埼玉文化賞(芸術部門)を受賞。「さやま」２号(狭山市立中央図書館刊)の選考委員を担当
平成11年（1999）	73歳	狭山市立博物館の企画展「さやまの石仏‘99」の展示冒頭に詩「草」の掲示を承諾し展示に協力する
平成19年（2007）	80歳	狭山市から静岡県富士市に転居
平成26年（2014）	87歳	米寿を翌日に控えた１月15日、肺炎のため富士市の自宅で逝去。狭山市入間川の慈眼寺(じげんじ)に眠る

昭和47年に狭山市に居を構えた吉野さんは、静岡県富士市に転居するまでの35年間、詩の創作だけでなく、校歌の作詞などに積極的に取り組みました。

昭和52年、狭山市に来て初めて刊行された、吉野さんの代表作とも言える詩集「北入曽」には、「茶の花おぼえがき（7ページ）」をはじめ、狭山での日常や自然を表した作品が収められています。詩集の題名に地名を用いることは大変珍しく、「北入曽」は吉野さんの狭山への愛着がとても感じられます。

文芸狭山の担当として

元狭山市立中央図書館司書・石川友子さん

市民の文芸誌「文芸狭山」

吉野さんが詩の選考を担当していた「文芸狭山」は、狭山市立図書館（現・中央図書館）で12年間発行してきた「読書感想文集」を引き継ぐ形で、昭和56年から平成８年まで刊行されました。その目的は、市民の文芸活動に対する意識の高揚を図るとともに、市民相互の交流の場を広げようというものでした。

創刊号から掲載のために選考が行われ、狭山市で積極的に詩の創作活動をなさっていた吉野さんにも、その編集委員として参加していただきました。

編集委員はその道の第一線でお仕事をされている方が多く、錚錚たる顔ぶれ（５ページ）でしたので選考はどの部門も真摯で厳しいものになりました。俳句・童句・川柳・短歌・詩の部門は編集委員の要望で、選考時に応募者の氏名を伏せて行われました。入選者の表彰式も毎年行われ、晴れの場で選考の講評に聞き入る人々の姿を拝見し、私は「文芸狭山」が真剣な生涯学習の場であると感じていました。

吉野さんが「詩」の選考を務めた文芸狭山

「吉野さんの詩集などは、中央図書館4階の郷土・参考資料室で閲覧できるほか、一部は3階の一般図書フロアで借りることもできるんです」と石川さん

入選者に対する吉野さんの優しさ

吉野さんが選考を担当されていた詩の部門は、他の部門とは少し変わったことをしていました。それは、入選して誌面に掲載された方々に吉野さんの選評の生原稿をプレゼントしていたということです。原稿用紙に、一人一人に向けて丁寧な文字で書かれた原稿を封筒に入れ、表彰式の当日、入選者に掲載誌とともにお渡ししていました。吉野さんは「選者が書いた自筆の選評を差し上げたら皆さんが喜ばれると思います」と仰っていました。

いつも人の気持ちに先回りして寄り添い、優しい穏やかなまなざしで迎えてくださる。吉野弘とは文学者である前に、こうした細やかな心遣いのできる方でした。吉野さんの詩は優しいと言われますが、ご自身の心根が反映しているのです。直筆の原稿を受け取った入選者の方の中には、入選を機に、ますます詩作に励んだ方が少なくはなかったと思います。

「文芸狭山」は小さな文芸誌でしたが、吉野さんをはじめとした選考の先生方も投稿者も本気で文学に取り組んでいた、当時としては希有な存在だったと思います。

私は、あのころの「文芸狭山」が持っていた気概と情熱が、狭山市の文化的な一側面を確かに担っていたのだという誇りを今でも感じています。

「文芸狭山」の編集に携わった編集委員の皆さん

水村梅里さん（俳句）
諸井一秀さん（川柳）
大野信貞さん（短歌）
吉野弘さん（詩）
真尾悦子さん（小説・随筆）
西沢正太郎さん（随筆）
土家由岐雄さん（童話・童句）
さねとうあきらさん（童話）
木村麦さん（表紙・挿絵）

狭山を愛した父　吉野弘

長女・久保田奈々子さん

私たち家族は昭和47年の10月、それまで15年ほど住んでいた板橋区の団地から狭山市に引っ越しました。前年に上梓した詩集「感傷旅行」が47年に読売文学賞詩歌俳句賞を受賞し、父も今後詩人として生きていける確信が持てたのだと思います。長年勤めていた会社を昭和37年に退職し、その後はフリーのコピーライターや雑文業を生業としていましたが、父は文筆業に専念すべく、自分の城を構えようという気持ちになったのかもしれません。

板橋では団地の狭い部屋に置